

マングローブ林のワイズユースと エコツアーにかかる調査研究

龍谷大学政策学部・助手 里山学研究センター研究員
榎並ゆかり

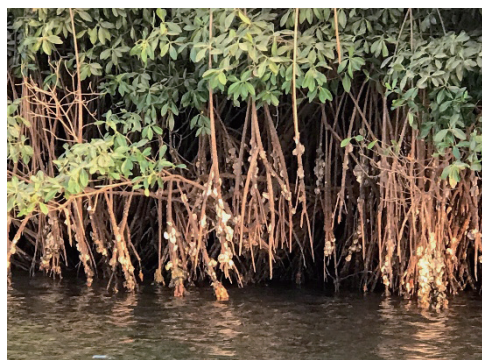
2023年度の研究活動は、以下の3点を中心に進めた。

1. マングローブ林のワイズユースとエコツアー

筆者が従来からフィールドとしているアフリカ地域において、新たなテーマとして、マングローブ林のワイズユースにかかる研究を開始した。セネガル共和国ファティック州フンジョン県において、ラムサール条約湿地・世界文化遺産登録のサルーム川デルタのフィールド調査を2023年春に実施したが、当地では世界遺産登録を契機に、マングローブ林を利用したピロッグ（船外機を搭載した小型船）で欧州からの観光客を案内するエコツアーが以前にも増して盛んにおこなわれるようになってきている。ところが、地域住民によるマングローブ林を利用した伝統漁業・カキの養殖も盛んであり、今後は観光が与える負の影響が強く予測される。観光業と村の暮らしをどう両立させていくかが今後の課題となる。



マングローブ林は生活圏の一部



天然カキの稚貝が根に付着し成長



世界遺産を機に展示室を設置



マングローブは屋根の骨組にも利用

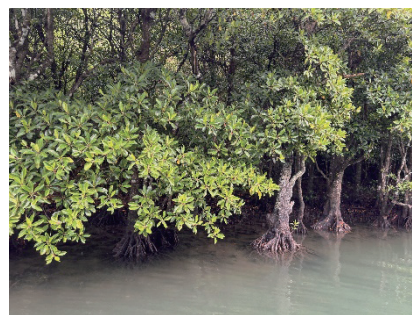
マングローブ林のワイズユースに関する先進事例調査として、まず西表島のユニークな取組に関する調査研究から取り組んだ。西表島の先進的な取組であるガイド付エコツアー及び竹富町が推進する「責任ある観光」に関し、現地調査を行った。西表島では保護すべきスポットを訪問する際には必ず登録ガイドが同行し、一日の人数制限を行うなど、オーバーツーリズムと環境破壊につながらないための方策を取っている。今後は他の先行事例及び失敗事例に関する調査を進めたい。



登録ガイドが案内



ヤエヤマヒルギ



オヒルギの群落

2. 「琵琶湖システム」に関する学生向けエコツアーの企画

滋賀県においては、世界文化遺産に登録された「琵琶湖システム」の要素のうち、沖島周辺における伝統漁法と外来魚に関するヒアリング調査を谷垣センター長とともに実施した。当該地域での調査と並行して、大学生向けのエコツアーの企画・実施を目指し、琵琶湖博物館、沖島漁業協同組合、琵琶湖汽船等と連携を進めている。2024年度6月に沖島での地引網体験をメインとするエコツアーを試行予定である。

3. 里山保全活動

京都府福知山市では、谷垣センター長とともに、地域団体及び大学生と連携しながら、70～80歳代の方々に里山の利用にかかるワークショップ型ヒアリング調査、里山あるき、小川の生物調査を行った。この地域の里山は個人及び共有地となっているが、現在はあまり利用されていない。里山保全は地域を守るための重要な要素であることは認識されており、地域団体と大学生とともに調査結果をもとに議論をおこない具体的なプロジェクト活動の立ち上げを行った。詳細は「福知山市中六人部地域での里山保全活動」で報告する。